

令和七年度春季入学春季募集
熊本県立大学大学院 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士前期課程
一般選抜試験問題 専門科目 解答例

【一】

問一 作者名・鴨長明
作品名・方丈記

問二 よどみにうかぶうたかたはかつ／きえかつむすびてひさしくとまる事なし

問三 可久能己止之

問四 世にある人と住まいと、いずれも、淀みの泡沫と同様にはかない。

(出題意図：「かくのごとし」の「かく」が何を指すのか、そこを読み取ることができるのかを問う)

問五 「棟」

【二】

①〈解答のポイント〉

以下のような内容を抑えつつ適切な用語を用いて論述されていること。

- ・文字種が三種類（アルファベットを含めると四種類）ある。
- ・表意文字（表語文字）と表音文字の両方を用いる。
- ・音素文字と音節文字の両方を用いる。
- ・縦書きも横書きもする。
- ・片仮名と平仮名はいずれも漢字を基に発達したと考えられる。
- ・漢字の読みが複数ある。
- ・原則として分かち書きをしない。

②〈解答のポイント〉

以下のような内容を抑えつつ適切な用語を用いて論述されていること。

- ・伝統的出版技術である整版と、新興の技術である活字版それぞれの特色や詳細が述べられている。
- ・中世末期に流入した朝鮮・ヨーロッパ由来の活字印刷技術についての言及がある。
- ・いわゆる古活字版の種類（勅版・伏見版・駿河版・嵯峨本）や、その出版物の具体について言及がある。
- ・特に嵯峨本において初めて民間での出版が行われたことの意義や、国文学作品が出版された影響に言及がある。

【三】

③〈出題意図〉

文法の出題では、文法の研究遂行に必要な基本的知識と日本語に関する分析能力、文章の論理的構成力をはかるようにしている。今回は、日本語における文の構成に関わる係助詞に関して従来どのような研究成果があるのか、それに対してどのような論点が考えられるかを問い、課題設定、理論構成が妥当かどうかを評価し、研究遂行に必要な能力があるかを見

た。採点のポイントは係助詞、副助詞に関する研究成果への目配りと、従来の説にかかる評価の理論構成を50%ずつとした。

④ 〈解答のポイント〉

以下のような内容を、的確に説明できていること。

- ・ 平安時代の主な日記文学作品を、成立年代や時期（前期・中期・後期）が分かるように、明示する。
- ・ 漢文日記との相違に触れる
- ・ 平安時代の日記文学作品がどのように確立したか、土佐日記・蜻蛉日記に触れて説明する。
- ・ 文学史における日記文学の位置づけについて、物語や和歌といった他ジャンルとの相互の影響関係を、具体的な作品名をあげつつ説明する。（日記文学と物語との関係、源氏物語以前と以後の日記文学、歌集と日記の作者の関係といった観点からの論述を想定し得る。なお、他時代に互る観点から説明することも可。
- ・ 作品名や人物名の表記を正しく書く。また、誤字脱字がない。

⑤ 〈解答例〉（Aの立場でなくても、理由がきちんと論述されていれば可。）

私はAの立場をとる。Bの場合、挿入子音が入ることは母音だけからなる音節を避けるためにあり得ることだと考えるが、その挿入される子音が数ある子音のなかでなぜ「ハ」なのかの説明しにくいと思われる。Cの立場は経済性の面で、ほかの2つに比べて問題があると考ええる。Aの立場は子音削除がポイントであるが、子音連続を避けて子音が削除されることは音節構造の観点からあり得ることで、ほかの2つに比べて説明されるべき問題が小さいものと考ええる。

⑥ 〈解答例〉

類似の発音の漢字音で示す「読若法」や、同じ発音の漢字で示す「直音法」では、発音を示す漢字が見つからなかったり、その漢字の発音自体が難読であったりとし、使用上に限界がある。その点、「反切法」は比較的容易に読める二文字の漢字で母音と子音を表示するため、使用範囲が格段に広がる。

⑦ 〈解答のポイント〉

以下のような内容を、的確に論述できていること。

大学生増加に伴う大学系同人雑誌の活況、文芸出版の活性化を地盤とする作家の職業化、〈文壇〉の成立から爛熟や関東大震災の景況など、多彩な社会状況を背景に幅広く展開した大正文学の諸相あるいはいずれかの側面に関して、何かしら具体的な作家・作品・事項の固有名を踏まえてきちんと論述されていることが求められる。

⑧ 〈解答例〉

CBIとCILとはともに目標言語を用いて教科学習を行う点は類似しているが、いくつかの点において相違点がある。

まず、その目的が異なる。CBIは語学教育であり、CLILは語学教育と科目教育の両方を目的としている。

次に、両者が提唱され発展してきた地域が異なる。CBIは1980年代にアメリカの英語教育(第二言語としての英語)の分野で発展した教授法であり、CLILは1990年代にヨーロッパで複文化・複言語主義の考えのもと発展した教授法である。

⑨ 〈解答のポイント〉

現行の五十音の各行の配置が梵字の配列をもとにしており、その配列は子音の力行からマ行まで、及び流音や接近音のヤラワ行は、いずれも概ね調音点が声門側から口唇側に配列されていることを前提として述べた上で、次のような諸点を踏まえて論述することを求めている。

◎ハ行が力行の前に位置する他、ラ行、ナ行、タ行の順序も相違している点について
・上欄の「喉」「顎」「舌」「歯」「唇」の配列順をみると、本書でも声門側から口唇側への順序が意識されていると見られること。

・特に古代に両唇音であった「ハ」は「二世紀以降に中央語では声門音になったため、十七世紀末成立の本書では力行の前に置かれたと考えられること。同様に、他の行も編者が意識した調音点の位置に基づく配列が行われていると推測されること。

◎ヤ行とワ行が力行の下に収められている点について
・ヤ行とワ行は現在では半母音と位置づけられているが、漢字音研究などに基づき、それと近い分析がなされたものと推測されること。

⑩ 〈解答のポイント〉

以下のような内容を抑えつつ適切な術語を用いて論述されていること。

・朱子学の思想的特徴(特に人間の心の動きを否定的にとらえる姿勢)を踏まえた上で、仁斎がそれを批判的にのりこえようと提唱した古学・古義学について言及している。
・欲望なども含めて人間の心の動きを「人情」として重視し、その発露としての詩(文学)をも積極的にとらえ推奨する姿勢が、幕初の朱子学者と相違することを説明できている。
・そのような仁斎の思想が、江戸時代(近世)の現世肯定的、人間肯定的思潮に合致し歓迎された点。

・直接的には、人間の非俗な側面を題材とする浮世草子を始めとする、元禄期の諸文芸に大きな影響を与えたこと。また、間接的に以後の文学作品の理論的背景となったことについて、具体的な作者・作品名を挙げてまとめられている。

⑪ 〈解答例〉

一般に、ある作品を「読」んだという記録は、読書的な受容の仕方を意味するが、兵藤氏の指摘する資料では、「読」は「読書」を指す受容形態ではなく、人に聞かせることを意図した音読行為であることがわかる。『太平記』の場合、両様の「読」みを考慮しなければならない点に注意が必要である。